



# 郷ひろみ

Go Hiromi

Text / Makoto Hasegawa Photo / Ko Hosokawa  
Hair, Makeup / KUBOKI(Three Peace)

ジャパニーズ・ポップスのど真ん中を行くんだって  
吹っ切れてからは怖いものはないですね

心にサーモスタットをかけず、  
温度を上げていくことが大切

名前の「GO」という響きは郷ひろみさんの音楽に向かう姿勢を的確に表しているのではないだろうか。もっと前へ。もっと先へ。70年代から現在までジャパニーズ・ポップスのど真ん中を歩みながら、今もなお輝き続けている。この秋には60歳を迎え、100枚目のシングルも予定されている。ライブでは歌って、踊って、話して、観客を惚れ惚れさせる。このパワーは一体どこから来るのだろうか？

——ステージに立つうえで心がけていることはありますか？

1本1本のステージ、1曲1曲の歌を大切に、最善を尽くしてパフォーマンスしていくことですね。なぜそうするかというと、客席には間違いなく僕よりも優れた人が観ているに違いないと思うからです。自分は総合点はそれなりに高いかもしれないけれど、僕よりも歌が上手い人がいる、僕よりも動きのいい人はいると常に思っている。驕ってはいけない、手を抜いてはいけないと肝に銘じてます。

——40数年やり続けて、今も進化し続けているのがすごいと思います。

僕は変化していかないと、進化はないと思ってるんです。変化の先には進化はない。毎年行うツアーの中でいかにして今までの違いを見せるか。その変化の積み重ねが進化に繋がっていくと考えています。

——変化自体はどうやってもたらされるものなのでしょうか？

日々の積み重ねが基本ですね。練習して100パーセント出来たと思ったから、普通はそこで終わりますよね。でも実は出来たところから勝負なんです。歌にしても、やればやるほど、隙間が見えてくる。これは100をやった人間じゃないと見えてこないもので。100をやる過程で不十分どころが見えてくるのは当たり前。100

0をやってそこからさらにやり続ける  
と必ず隙間が見えて来るんです。その隙間を埋める作業を出来るかどうか勝負。それは僕は何年前に知りました。これは終わりが無いんだなって。

——郷さんの成長への強い意志はどこから来るのでしょうか？

自分はまだまだだという意識があるからでしょうね。それと、心にサーモスタットをかけないようにしているからでしょうね。そうすると、モチベーションの温度を上げていける。僕自身、自分の人生の成功は60代から始まる、それからの10年間がベストになっていくだろうなと思っていました。根拠もありません。成功とは多分、もがいて苦しむことを続けてきた人間しか手に出来ないものなんですよ。自分ももがき苦しみながらここまでやってきたので、やっと成功へのスタートラインに立てた(笑)ところだなと思っています。

## 100枚目のシングルも 自分の中では通過点のひとつ

——著書『NEXT』の中で「曲との出会いが自分を育てた」と書かれていますが、曲に育てられるというのは具体的にどういうことでしょうか？

誰でもそうですが、デビューして2、3年たつと、まわりのことが見えてきて、自分自身のこと少しは客観的に見れるようになってくるんですよ。僕にもその時期が来て、自己分析したら、これはひどいなと(笑)。歌もダンスも自分が思い描いているイメージからはほど遠かった。なんとかしないといけないって気づきがあった中で出会ったのが筒美京平先生からいただいた『よろしく哀愁』でした。この曲をしっかりと表現出来る自分にならないといけないと思いました。

——ターニング・ポイントで様々な曲と出会ってきているわけですね。  
——そうですね。『お嫁サンバ』と出会った時はメロディをいただいて素晴らし

い曲だと思って、その後、歌詞が来たら、  
「1・2・3バ、2・2・3バ」で、なんだ、  
これは？って(笑)。

——確かに、あの歌詞はインパクトがありますね。

プロデューサーに自分が抱いた疑問をぶつけたら、「これはいつまでも歌い継がれていく歌になりますから」って。そんな先のことはどうしてわかるんだろうと思ったんですが、「この歌を明るく歌えるのはあなたしかいない」と言われて、納得して歌って、出来上がったのが『お嫁サンバ』。その経験を後に活かすことも出来ました。

——というところ？

『GOLD FINGER '99』という曲と出会った時、日本語詞を康珍化(かみちんか)さんに書いていただいたんですが、最初は「ACHICHI ACHI」の後は英語の歌詞が入っていたんですよ。『お嫁サンバ』の経験があつて、キャッチーということが自分の中で消化されていたので、康珍化さんに「ACHICHI ACHI」を連発させていきたいと思います」と提案して、あの形になりました。これまでに99枚のシングルを出してきましたが、そこでの経験がどこかで活かされて、何年かたって振り返った時に、成長させてもらったんだと気がつきました。

——次のシングルで100枚って、おそらく前人未達の記録だと思います。

コンスタントに最前線で活動している証しなのではないですか？  
——アメリカに行って、休んだ時期もありましたが、それでも100という数字に到達出来るのは自分でも誇れることだとは思っています。でもこれはファンの人がいいたから、そして多くの人が支えてくれたからで、僕だけの力じゃないですよ。もちろん感慨深くはあるんですが、ただ僕の中では通過点と  
——著書で「歌は自分の天職」と書かれています。そう確信したのは？  
ある時期が来るまではなかなかそうは思えなかったんです。40代の後半な



のかな。自分自身の音楽について、吹っ切れてからですね。僕だけでなく、長く仕事を続けている方はみなさん、いろんな時代があると思うんです。画家だったら、明るい色使いになったり、暗い色使いになったり、時代によって、作風が変わっていく。同じように僕も『お嫁サンバ』の時期もあれば、バラード3部作の時期もあれば、もっとかっこいい歌を歌いたいと思つた時期もあった。そして『ジャババン』（『2億4千万の瞳—エキゾチック・ジャババン—』）って歌うのはもういいかなって時期もあった。でもどこかで吹っ切れたんでしょね。かっこいい曲は他の人に任せて、郷ひろみは歌謡曲のど真ん中、ジャパニーズ・ポップスのど真ん中を行くべきなんだなって。

——そう感じた直接的なきっかけはあったんでしょうか？

——たくさん複合的な要素があつて、自然に悟っていったんだと思います。『ジャババン』でいいんだ、"1・2・3バ"でいいんだって吹っ切れてからは、もう怖いものはないですね。

きれいに続いて終わる歌のように、人生もデイミヌエンドしていきたい

——ライブではブルース、ラテン、ジャズなど、多様な要素を取り入れた起伏のあるステージをやられています。

ライブは2時間くらいあるので、多くの自分の要素を観ていただきたいです。自分がやりたい音楽をやるということではないです。ライブは魅せる要素が大きいので、いかに楽しんでもらうかが最大のポイントですね。

——先々のシンガーとしてのビジョンはありますか？

——ジャパニーズ・ポップスのど真ん中をやるのが大前提で。その上で70歳の時にはこうありたいというものを成立させるために、今しなければいけないこと、しなくていいことの取捨選択をしていかなければと思っています。

——郷さんにとって、歌うことの魅力とはどんなことでしょうか？

歌は僕にとっては限りなくスリリングなものなんです。楽器は押さえれば音が出るけれど、歌はその時になつてみないと、どうなるかわからないところがある。体調のいい日もあれば、すぐれない日もある。でもそんなことは微塵も言えないわけですから。しかも歌には完璧はない。及第点は取らなきゃいけないけれど、満点なんてほとんどない。自分の中で大満足なんてことは4年に1回くらい。オリンピックと同じくらいの頻度ですね（笑）。しかもライブの中でせいぜい1曲。それくらい歌というのは難しい。だからこそ、ライブで歌うのはスリリングだし、モチベーションが上がるし、自分を成長させてくれるんだと思います。

——その探求の日々はまだまだ続いていくわけですね。

バラードを歌う時、最後の音をずつと伸ばすじゃないですか。ウウウウーって。長くきれいに伸び続けると、みなさん、拍手してください。でも途切れたり、かすれたり、あるいは音程が下がったら、あれ？ってことになる。だから腹筋と背筋を使って細心の神経を使わなければならない。人生も同じ。ゆつくりと最後にすーっときれいに終わっていくのが自分の人生の理想の形。それは歌から学んだことですね。いつこの世を卒業するかはわからないけれど、それまではずつと神経を使って、ある時期からデイミヌエンド（音楽記号。だんだん弱くという意味）していきたい。だからまだ自分のデイミヌエンドは始まっていないんですよ。いよいよこれから自分の成功が始まると思っていますから。

PROFILE シンガー、俳優。1955年10月18日生まれ。福岡県出身。1972年、NHK大河ドラマ「新平家物語」で俳優としてデビュー。同年8月シングル「男の子の子」で歌手デビュー。「よろしく哀愁」「お嫁サンバ」「言えないよ」「GOLDEN EYES」など数々のヒット曲を送り出し、現在まで99枚のシングルを発表。5月20日には100枚目のシングル「100の願い」をリリースする。5月27日から全国ツアーもスタート。



ライブで歌っていて、  
100点満点だと思えた瞬間は  
ほんのわずか。



Long Interview

**Hiromi Go**